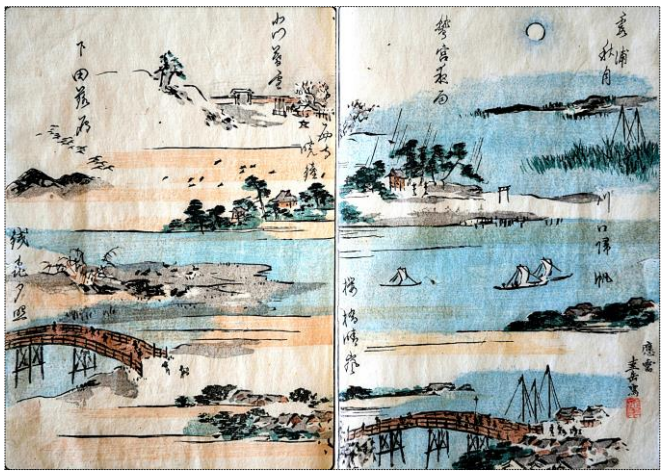
Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第１５３号　　2022(令和４）年２月15日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス



「土浦八景図」（「草久さ集」（1857［安政４］年））

土浦八景

霞ヶ浦の月は、江戸時代に選定された「土浦八景」には、「霞浦秋月」として選ばれています。「八景」とは、ある地域における選ばれた８つの優れた風景を指し、土浦では、「土浦八景」のほかに「霞ヶ浦八景」も選定されています。国立環境研究所の 2000 年の調査によれば、日本全国には 1133 の八景があり、茨城県のそれは 81 ケ所に上っています（群馬県に次いで全国第２位）。

敬称を略し、引用文中の旧字体は新字体に改めました。

また、引用文中の【　　】内は筆者による注記です。

八景

「八景」は、中国の北宋で選ばれた「瀟湘（しょうしょう）八景」が初で、その後のモデルとなりました。瀟湘とは、中国の湖南省を流れる２つの河、瀟水（しょうすい）と湘水（しょうすい）とに基づく地名で、２つの河川が合流して洞庭湖という大きな湖に注ぐ地域です。この瀟湘の地は、中国有数の景勝地として名高く、古くからさまざまな神話や伝説を生み、数多くの詩人や画家を誘ってきました。そうした画家の１人であった宋廸（そうてき 11 世紀後半～没年不詳）が描いた「瀟湘八景図」が、瀟湘八景の始まりと言われています。宋廸の八景図は現存していませんが、彼が描いた景観は、次の８つです。

「瀟湘夜雨　しょうしょうやう」
瀟湘にしとしとと降る夜の雨の風景

「平沙落雁　へいさらくがん」
雁の群れが汀に舞い降りて来る光景

「烟寺晩鐘　えんじばんしょう」
夕霧に煙る寺の鐘の音を聞きながら夜を迎えるさま

「山市晴嵐　さんしせいらん」
晴れた日、山里に霞の漂っている風景

「江天暮雪　こうてんぼせつ」
日暮れの河に雪が降りしきるさま

「漁村夕照　ぎょそんせきしょう」
夕焼けに染まる鄙びた漁村の風景

「洞庭秋月　どうていしゅうげつ」
洞庭湖の上に冴え渡る秋の月

「遠浦帰帆　えんぽきはん」
帆掛け舟が夕暮れ時に戻って来る光景

一般に、名所を描く場合には、その中心となる山水や寺社といった特定の場所や建造物を画材とすることが多いのですが、宋廸は、四季や晴雨などの気象、昼や夜などの時間帯の違いを強く意識し、選び描いています。どこででも見られる風景ですが、いずれも、心に沁み入る風情のあるものばかりで、宋廸は、瀟湘地方の豊かな自然に魅せられていたのでしょう。この瀟湘八景の影響を受けて、台湾、朝鮮、日本など、東アジア各地で、「夜雨」・「落雁」・「晩鐘」・「晴嵐」・「暮雪」・「夕照」・「秋月」・「帰帆」をテーマにした八景が選定されてきました。

日本にも、鎌倉時代から室町時代に掛けて、牧谿（ぼっけい）や玉澗（ぎょっかん）などの瀟湘八景図がもたらされ、その内容を踏まえ、各地で八景が選定されてきました。我が国で最初に八景が選ばれたのは、14世紀の「博多八景」・「大慈八景」だと言われています。一番有名な「近江八景」は、16世紀に定められました。

近江八景

近江八景には、琵琶湖南部地域を対象に、

「唐崎夜雨（唐崎神社）」
「堅田落雁（浮御堂）」
「三井晩鐘（三井寺＝園城寺）」
「粟津晴嵐（粟津原）」
「比良暮雪（比良山系）」
「瀬田夕照（瀬田の唐橋）」
「石山秋月（石山寺）」
「矢橋帰帆（矢橋）」

が選ばれています。

これ以後、瀟湘八景のみならず、近江八景をも手本として、日本各地で「八景」が選ばれてきました。絵画や文学作品にも多く取り上げられ、特に19世紀には、浮世絵によって全国に知られるようになりました。特に、浮世絵師歌川広重によって描かれた錦絵による名所絵（浮世絵風景画）「近江八景」は、彼の代表作の１つであり且つ近江八景の代表作となっています。名所絵揃物の大作である「東海道五十三次」が成功を収めた後を受けて、1834［天保５］年頃、版元保永堂によって刊行されています。

土浦八景

最初の「土浦八景」は、1752［宝暦２］年に土浦藩主土屋篤直（あつなお）が選んだ「垂松亭八景」で、８人の藩士が詠んだ漢詩や和歌を書き加えた「垂松亭八景誌巻」という巻物が作られました。藩主による八景選定後、江戸時代後期には、町人が八景を作るようになり、沼尻墨遷（1775～1856）、如蓮（神龍寺第二十世住職褒祥大寅大和尚（1785～1858））、内田野帆（1781～1855）、色川三中（1801～1855）、川田幸枝（1783～1845以降）などが担い手となって、土浦八景（「銭亀夕照」・「下田落雁」・「神龍寺暁鐘」・「桜橋晴嵐」・「川口帰帆」・「霞浦秋月」・「鷲宮夜雨」・「北門暮雪」）が新たに選定されました。彼らは八景を詠んだ作品（漢詩・和歌・俳句）を多く遺していますが、その中で、内田野帆の句が唯一出版されました。その影響力は大きく、今日では、土浦八景と言えば、先ず野帆の名が挙げられます。

野帆の土浦八景句

内田野帆（うちだ やはん）は、土浦大町に生まれ、幼名を大蔵、後に由平と改名し、晩年は喜平治と称しました。彼は、江戸後期の土浦周辺で盛んになった俳諧の中心的な存在で、俳聖芭蕉の蕉風（正風）、いわゆる「侘び・寂（わび・さび）」の流れを汲む俳人として活躍し、坦々堂または坦堂と号しました。その野帆の代表句とされるのが、次の「土浦八景句」です。

○「銭亀夕照」大町　桜川銭亀橋
ゆふたちや　日の暮直す　橋の反（そり）

夕立が通り過ぎた後、もう一度陽が射し、暮れていく情景を詠んだ句です。夕立の後の涼しさも感じられます。銭亀橋は、江戸初期に桜川に架けられた橋で、通るのは水戸街道です。西北に筑波山を

仰ぎ、東南には霞ヶ浦が控える景勝の地でした。現在、霞ヶ浦は見えませんが、筑波山の山容全てが見渡せ、四季折々の姿を楽しむことができます。

○「下田落雁」下田 土浦一中以北及び以西の地域

雁落る 音に雁たつ 下田かな

江戸時代、旧6号国道より北には、沼地・田畑・荒れ地が点在し、土浦藩の狩猟地となっていました。遙か筑波嶺を目指して飛ぶ雁の群れが見えるようです。

○「神龍寺暁鐘」西門（現文京町） 神龍寺

寒き夜の ひとちからなり 鐘の声

神龍寺は、土浦城主菅谷氏の菩提寺として創建され、土浦藩士屋家の菩提寺にもなっていました。野帆の頃の住職大寅大和尚（号は如蓮）は、和漢の学に通じ、和歌・詩文を善くしたので、野帆たちとも交流がありました。暁天坐禅（夜明け前の坐禅）中に鳴らされる鐘の音を詠んだものなので、『草久さ集』では、「晩鐘」ではなく「暁鐘」となっています。

○「桜橋晴嵐」桜橋（水戸街道の橋） 保立食堂前

魚誘（さば）く 声から晴て きりの朝

桜橋付近には、霞ヶ浦からの川筋が入り、そこは、町の中央の川口入りとして、軍事上でも水上交通の面でも重要な役割を果たしていました。江戸初期に、銭亀橋と同時にここにも橋が架けられ、桜橋と名付けられました。水戸街道の中心地、川口入りの高瀬舟や漁船の発着点として、土浦一の賑わいを見せていた所です。この句は、その賑わいが始まる前の、朝の光景を詠んだものです。現在は、バス停にその名を残すのみです。

○「川口帰帆」川口河岸 モール505付近

帰る帆に 向ふて出すや 涼ミ舟

川口河岸は、物資運搬の高瀬船や漁船の停泊地でした。江戸川の開削と利根川の銚子口への付け替えによって、西浦（霞ヶ浦）・北浦・利根川・江戸川を結ぶ内陸水路が開けました。その結果、土浦から大消費地の江戸へさまざまな物資（米・味噌・醤油・薪炭など）が、高瀬船で運ばれました。この句は、川口河岸へ戻る漁船や高瀬船と入れ違いに、霞ヶ浦での夕涼みに漕ぎ出す光景を詠んだものです。

○「霞浦秋月」霞ヶ浦

是とても 春ハ霞むか 浦の月

秋の一夜、月見の舟を霞ヶ浦に浮かべたのでしょうか。「今宵ははっきり見える月であっても、霞ヶ浦という名のとおりに、春には霞が掛かるのだなあ。」と、感慨に耽りながら、澄み渡る湖面を照らす名月を愛でています。

○「鷲宮夜雨」東崎 鷲宮神社

寝こゝろや 神楽のあとの 雨の音

鷲宮とは鷲神社のことで、旧暦の1月15日には「じゃかもこじゃん」という祭が行われていました。この祭は、境内にあった千手院という阿弥陀堂で、講中の年寄りたちが鉦（かね）・太鼓を叩き、大きな数珠を廻しながら念仏を唱えたのが始まりとされ、この念仏供養と併せて神楽（田楽）も行われたようです。「じゃかもこじゃん」は、その囃子の音から出たものと言われています。

○「北門暮雪」横町 常北町常陽病院付近

降暮し 雪やともかく 関の前

北門は、土浦の北の出入口でした。水戸街道の出入口として、門の前には約100メートルに亙るS字形の「馬だし」が造られ、城の北の防御点となっていました。ここは土浦と真鍋との境でもありました。

いずれも、切れ味のよい作風で土浦の景物を詠み、幾つかある「土浦八景」の句の中でも、出色の、野帆の代表作となっています。

野帆・芭蕉句碑

野帆は、1855［安政2］年3月22日に享年75歳で亡くなり、土浦市大手町の東光寺にある内田家の墓地に葬られました。

その追善供養のために、同年10月12日（芭蕉翁の命日）に、門人たち25名が、野帆の句碑

声に身を 持たせて揚る 雲雀哉

を、野帆が主宰した句会が開かれていた東光寺の薬師堂前左側に建立しました。揮毫は、如蓮道人（神龍寺第二十世住職大寅大和尚）。さらに、1857年の3回忌には、門人たちによって追善句集『草久さ集』が編纂・出版され、それには、野帆の詠んだ「土浦八景」の句と「土浦八景図」とが掲載されています。

「野帆句碑」　「東光寺薬師堂」　「芭蕉句碑」

東光寺には、野帆の句碑と並んで、松尾芭蕉（1644～1694）の句碑も建っています。

八九間（はっくけん） 空で雨降る 柳かな (注)

句碑は薬師堂前右側に据えられ、野帆が揮毫しています。その筆跡は、72歳とは思えぬほど、おおらかで勢いに溢れています。野帆は、芭蕉を慕い、門人らの協力を得て、芭蕉翁159年忌日の当日・1852［嘉永5］年10月12日に、この句碑を建立しました。碑陰には、世話人8名と門人9名との雅号も刻まれています。

芭蕉は、奇抜な趣向を狙う言葉遊びの談林俳諧に対し、自然や庶民生活の詩情を余韻豊かに表現して、蕉風俳諧と呼ばれる芸術性の極めて高い句風を確立していきましたが、その句風は、多数の人々の支持を受け、全国各地に芭蕉を師と仰ぐ連中（俳句仲間）が増えていきました。

その芭蕉亡き後、全国津々浦々に3200を超える芭蕉塚（翁塚）や句碑などが建立されてきました（『石に刻まれた芭蕉』弘中 孝）。歌碑・句碑といった類は、それが詠まれた地に、関係した人々によって建立されるのが一般的ですが、芭蕉の碑は、東光寺のように発句の誕生地とは全く違う地にも建立されています。このことは、江戸期から現代まで、俳諧に親しんだ人々が多かったこと、中でも芭蕉を敬愛し、その芭蕉塚碑・句碑を建立することを悲願とし、喜びとした各地の門人、俳諧宗匠を中心とする連中が多かったことを物語っています。建立された芭蕉塚や句碑は、俳諧連中の俳諧修行の拠り所・シンボルであり、芭蕉翁の供養塔でもありました。

(注)**八九間 空で雨降る 柳かな**

『続猿蓑』巻頭の句で、1694［元禄7］年春の作。芭蕉の数ある句の中から野帆が「八九間」の句を選んだのは、自分の代表句と評価されていた

声に身を 持たせて揚る 雲雀哉

と同様に、空を見上げた瞬間を捉えた句であったからだと思われる。弟子たちも、野帆の考えを知っていたので、「声に身を」の句を碑に刻んだのであろう。

※土浦市の芭蕉句碑（東光寺以外）（『石に刻まれた芭蕉』より）

このあたり 目に見ゆるものは 皆涼し　東崎町・鷲宮神社

春も漸（やや） けしきとゝのふ 月と梅　小松・二十三夜尊

参考文献

第38回特別展展示図録『土浦八景 よみがえる情景へのまなざし』（2017土浦市立博物館）

（高21回　松井泰寿）